葛城市文化財調査報告　第６冊

茶山古墳

－保存のための範囲確認調査報告－

2020
葛城市教育委員会

葛城市文化財調査報告　第6冊

茶山古墳

―保存のための範囲確認調査報告―

2020年3月
葛城市教育委員会

序

葛城市の西を画する葛城・二上山系の山麓域には、大小あわせて約８００基の古墳が築かれています。そのほとんどが、古墳の集まる群集墳によってしめられています。今回『葛城市文化財調査報告第６冊』として報告する茶山古墳も、そのひとつです。

葛城市當麻に所在する茶山古墳は、別名「竹内第 34 号墳」といいます。葛城市竹内から當麻にかけて広がる竹内古墳群を形成する古墳です。

茶山古墳は、昭和２１年に奈良県教育委員会の手によって、一度発掘調査がおこなわれました。しかし、戦後間もない時代背景もあり保存措置がとられることはありませんでした。そのため茶山古墳を特徴づける凝灰岩製の家形石棺は、風化の一途をたどっていました。

葛城市教育委員会では、これまでにもこのような古墳に対し保存措置をこうじてまいりました。その一環として、茶山古墳についても保存・保護をおこなう計画をたてました。その事業過程において、過去の知見を補足するさまざまな情報を得ることができ、より古墳に対する理解を深めることとなりました。懸念していた石棺につきましても、現地保存措置の実施を完了しました。再検証が可能となることに留意しており、今後の研究の進展に期待したいと思います。

調査期間においては、関係各位からさまざまなご協力をいただきました。今後とも、当市の文化財保護行政に対しご支援賜りますよう切に希望いたします。

令和２年３月

葛城市教育委員会

教育長　杉澤茂二

例　言

1．本書は、奈良県葛城市當麻に所在する茶山古墳（竹内第34号墳）について、保存のために行った範囲確認調査の報告書である。

調査は、葛城市教育委員会・葛城市歴史博物館が実施した。現地での調査実施期間は次のとおりである。

第1次調査　平成29（2017）年3月12日　～　3月23日

第2次調査　平成30（2018）年2月20日　～　3月9日

2．　調査の体制は以下のとおりである。

葛城市教育委員会

教育長	杉澤茂二
教育部長	吉村孝博（平成29年3月まで）
	和田正彦（平成30年3月まで）
総務課長	前村芳安（平成29年3月まで）
	吉井　忠

葛城市歴史博物館

館長	千賀　久
主幹	吉岡昌信（平成30年3月まで）
調査担当　主査	神庭　滋

3．本調査にあたっては、下記の方々・機関よりご協力ならびにご指導、ご教示をいただいた。記して謝意を表したい。（五十音順・敬称略）

奥田郁代　奥山誠義　河崎衣美

奈良県教育委員会文化財保存課　奈良県立橿原考古学研究所　ほんみち竹内廟所

4．調査中の基準点測量、空中写真撮影、現地作業、機材準備等に関しては下記の業者に委託した。

（株）智原測量設計事務所　（株）IDA　（株）アート

5．1946年の発掘調査で出土した須恵器の再実測ならびに本書での報告は、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館と共同で行った。記して謝意を表したい。（五十音順・敬称略）

青柳泰介　吉村和昭

6．報告書作成には、渡部弘美の参加があった。

7．報文の執筆・編集は、葛城市歴史博物館館長千賀　久の指導を受け、神庭が行った。

8．図面、写真等の調査記録一式は、葛城市歴史博物館において保管している。

9．葛城市歴史博物館管理コードは、以下のとおりである。

第1次調査　01609　第2次調査　01711

10．第1次調査は平成28度、第2次調査は平成29年度国庫補助事業である。

凡　例

1．遺構実測図の座標は、世界測地系に基づくものである。表記に際しては、1,000 m以上の数値を略したものがある。

2．遺構実測図中の標高は、東京湾平均海面（T.P.）からの値である。

3．遺構実測図は、平面図、断面図ともに 1/10 を基本とした。

目　次

序

第Ⅰ章　位置と環境 …… 1

　1節　地理的環境 …… 1

　2節　歴史的環境 …… 1

　3節　茶山古墳に関する既往の調査 …… 4

第Ⅱ章　経緯と経過 …… 7

第Ⅲ章　茶山古墳の調査 …… 9

第Ⅳ章　保存措置 …… 19

第Ⅴ章　まとめ …… 21

挿図目次

図1　調査地周辺のおもな遺跡 …… 2

図2　茶山古墳　家形石棺と棺外遺物（1946 年）…… 6

図3　茶山古墳　出土遺物（1946 年）…… 6

図4　竹内古墳群と茶山古墳（竹内第 34 号墳）…… 9

図5　現状地形測量図（S=1/100）…… 10

図6　トレンチ配置図（S=1/100）…… 12

図7　第1・2トレンチ土層断面図（S=1/25）…… 13

図8　第3・4トレンチ土層断面図（S=1/25）…… 13

図9　家形石棺実測図（S=1/40）…… 16

図10　家形石棺　南側蓋石復元図（S=1/20）…… 17

図11　墳丘復元と家形石棺 …… 17

図１２　須恵器実測図（S=1/4）……18
図１３　家形石棺復元図（S=1/40）……23

表目次

表１　遺物観察表……18

図版目次

図版１　調査前現況（南から）
調査前現況（南西から）
図版２　完掘状況（上空から、上が北）
完掘状況（西から）
図版３　第1トレンチ土層断面（南東から）
第1トレンチ墓壙検出状況（南から）
図版４　第2トレンチ土層断面（南東から）
第2トレンチ墓壙検出状況（南から）
図版５　第3トレンチ土層断面（西から）
第4トレンチ土層断面（西から）
図版６　家形石棺（直上から）
家形石棺内の状況（南から）
図版７　家形石棺閉塞状況（南西から）
家形石棺　西側側石にのこる工具痕（南東から）
図版８　家形石棺　南側蓋石　西側縄掛突起周辺の剥離状況（西から）
家形石棺　南側蓋石　東側縄掛突起周辺の剥離状況（南東から）

第Ⅰ章　位置と環境

1節　地理的環境

葛城市は、奈良盆地の南西端付近に位置する。その地理は、奈良県と大阪府との境界を形成する金剛山地に大きな影響を受けている。葛城市の西半は、山間部および裾野に向かって広がる山麓地域によって占められる。南から葛城山（959.2 m）、岩橋山（655.8 m）と続く山間地域は、平石・竹内峠を隔てて二上山（雄岳 517m・雌岳 474 m）へと連なる。山麓地域には、山間部より流れ下る河川によって下刻された谷地形が複雑に入り込み、この地域の地理的特徴を生み出している。市の東半は、沖積地である。西側に広がる山麓地域から発達した扇状地が広がり、西半とは対照的に穏やかな地勢を呈する。

茶山古墳は、葛城市の中部にあたる大字當麻・竹内にかけて位置する竹内古墳群内に所在する。別名を竹内第 34 号墳と呼称する。竹内古墳群は、熊谷川の下刻する谷地形の北岸、地元では「キトラ山（やま）」と呼ばれる標高約 146.6 mの丘陵上に展開する。茶山古墳は、キトラ山山塊から東にのびる尾根筋のひとつ、その東端付近に位置する。標高は 112.5 mである。

2節　歴史的環境

ここでは、茶山古墳・竹内古墳群周辺に所在する主要な遺跡について、時代順に述べる。

【縄文時代】

近接して竹内遺跡[1]が位置する。竹内遺跡は、現在の国道 166 号線を挟んで南北約 1km、東西約 500 mの範囲に展開すると考えられている。過去に行われた資料採集や発掘調査の結果より、縄文時代草創期から晩期にかけての遺物が出土することが知られる。

【弥生時代】

縄文時代に引き続いて、竹内遺跡が展開する。弥生時代中期を中心に土器、各種石器類が顕著に出土する。石器制作の痕跡も検出されており、打製石剣をはじめとしてサヌカイトを利用した各種石器類の制作工房が所在した可能性が高い。

竹内古墳群が展開する丘陵上でも弥生土器が採集されており、キトラ山遺跡[2]と呼称される。高地性集落の存在を指摘する考え方があるが、その性格は断定できない。近接する竹内遺跡と一体となり集落の営みのなかで丘陵が利用されていた可能性が考えられる。

【古墳時代】

集落遺跡では、引き続いて竹内遺跡があげられる。時期ごとに中心となる地域が遺跡内で移動すると考えられる。前期は、遺跡北部を中心に溝や土坑などが検出されている。中・後期になると、遺跡の南部が中心となり、大溝などが検出されている。営みの中心が北から南へ移動する背景は、

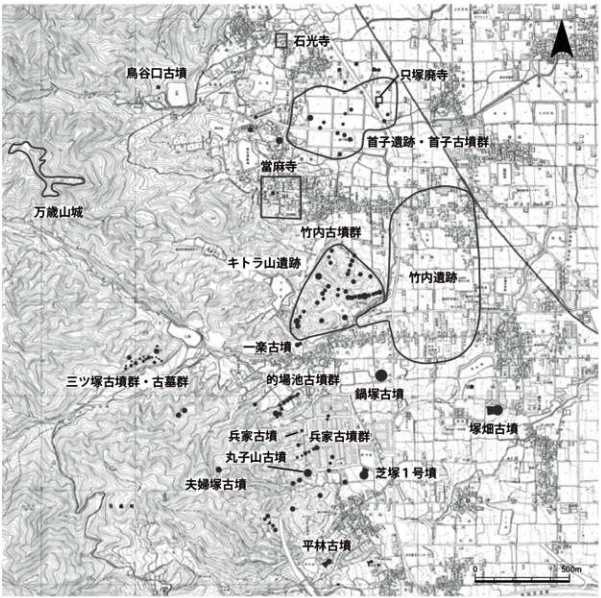


図1　調査地周辺のおもな遺跡

古墳時代中期以降に河内平野の開発が進んだことにあると考えられる。河内地域と奈良盆地を結ぶ交通路のひとつとして、竹内峠越えの利用が活発化したことにともなう現象と想定される。前述の大溝内からは、一集落で使用する量としては多すぎる初期須恵器が出土しており、竹内遺跡がこの時期、河内方面からの物資集積所としての性格をもっていたのではないかとの指摘がなされている[3]。中期後半には、竹内峠越えより北側、二上山麓地域において首子遺跡[4]の形成がはじまると考えられる。

古墳は、古墳時代中期前半に鍋塚古墳（円墳・直径約40 m）[5]を嚆矢として築造がはじまる。中期中葉には、兵家古墳群[6]・的場池古墳群[7]の造営が開始される。兵家古墳群内に位置する8号墳（丸子山古墳・円墳・直径34 m）は、鍋塚古墳の規模に近いことが注目される。鍋塚古墳の東方約500 mには、当地域においては最大の規模をもつ塚畑古墳（前方後円墳・全長70 m）[8]が位置する。中期後半の築造と考えられており、当地域の首長が勢力を拡大する方向で推移していたことを想定させる。鍋塚古墳・塚畑古墳ともに竹内峠越えの沿線に築かれており、当地域にとってこ

の交通路が重視されていたことを物語る。塚畑古墳とほぼ同時期に帰属すると考えられる一楽古墳（前方後円墳・全長 30 ～ 40 m）[9] の位置も、基本的に同様の視点にたった選地によるものと考えられる。竹内古墳群についても同様の背景が想定される。

古墳時代後期になると、横穴式石室を埋葬主体とする古墳が築造される。芝塚1号墳（前方後円墳・全長 50 m）[10] と、それに引き続いて築造される平林古墳（前方後円墳・全長 62 m）[11] は、塚畑古墳に続く当地域の首長系列の墓と考えられている。群集墳は竹内古墳群のほか、首子遺跡に隣接して首子古墳群 [12] の造営が開始される。

終末期古墳として夫婦塚古墳 [13]、鳥谷口古墳 [14]、兵家古墳 [15] が知られる。夫婦塚古墳は、一墳丘に2基の横穴式石室が並列して築かれている。西石室で漆喰が使用されていることが特筆される。鳥谷口・兵家古墳は、凝灰岩製の横口式石槨を主体部として採用する。兵家古墳の築造時期は8世紀に降るものと考えられている。三ツ塚古墳群 [16] は、古墳時代終末期に展開する群集墳である。

【飛鳥・奈良時代】

二上山麓に古代寺院が展開する。7 世紀前半の瓦が出土する只塚廃寺 [17] が嚆矢となる。瓦の出土量が非常に少ないため、小規模な仏堂に使用されたものと想定される。7 世紀後半以降、礎石建物をともなう寺院の造営が開始され 9 世紀には廃絶する。7 世紀後半には石光寺 [18] の造営が開始される。金堂に相当する建物と塔跡が検出されており、東面する法隆寺式伽藍配置をとると想定される。金堂相当建物近くから、同時期の制作と考えられる凝灰岩製の石仏が出土している。7 世紀末には當麻寺 [19] の造営が開始される。東西両塔をもつ薬師寺式伽藍配置に本堂（曼荼羅堂）を備えた様相が整うのは、平安時代初頭と考えられている。

三ツ塚古墳群の墓域内には、木棺墓や火葬墓からなる三ツ塚古墓群 [20] が営まれる。

【中世】

平安時代以降、荘園開発が実施され、当該地域は平田庄の一部にあたると考えられている。この平田庄を管理する荘官として、葛城市北部には万歳（まんざい）氏、南部には布施（ふせ）氏が跋扈していたとされる。当該地域周辺は、万歳氏の影響範囲にあたる地域と考えられている。竹内峠越えを見下ろすように万歳山城 [21] が築かれており、この交通路が軍道としても重要視されていたことを物語る。伏越（ふしごえ）と呼ばれる交通路の出口付近にあたる葛城市兵家の金毘羅神社が位置する丘陵上にも山城跡があると想定され、布施氏との間で終始緊張関係にあった万歳氏の城のひとつと考えられる。

註

(1) 樋口清之　1936「大和竹内石器時代遺跡」　大和国史会
奈良県立橿原考古学研究所編　1998「竹内遺跡第14・15次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」1997年度（第三分冊）　奈良県立橿原考古学研究所
(2) 當麻町史編纂委員会　1976「當麻町史」　當麻町教育委員会
(3) 木下　亘「須恵器から見た葛城地域の物流拠点」「葛城氏の実像　－葛城の首長とその集落－」　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第65冊　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
(4) 奈良県立橿原考古学研究所編　1979「首子遺跡群発掘調査報告」當麻町埋蔵文化財調査報告第2集　當麻町教育委員会
(5) 奈良県立橿原考古学研究所編　1979「竹内鍋塚古墳発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」1978年度　奈良県教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所編　2013「鍋塚古墳」「奈良県遺跡調査概報」2011年（第二分冊）　奈良県立橿原考古学研究所
(6) 奈良県立橿原考古学研究所編　1978「兵家古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第37冊　奈良県教育委員会
(7) 奈良県立橿原考古学研究所編　1982「的場池古墳群」當麻町理蔵文化財調査報告第1集　當麻町教育委員会
(8) 小栗明彦　2001「塚畑古墳」「大和前方後円墳集成」橿原考古学研究所研究成果第4冊　奈良県立橿原考古学研究所
慈城市歴史博物館編　2015「弥宮池西1号墳　－保存のための範囲確認調査報告－　付. 塚畑古墳の調査」慈城市文化財調査報告第5冊　慈城市教育委員会
(9) 島本　一　1938「大和竹之内出土の形象埴輪」「大和志」第5巻第6号　大和国史会
小栗明彦　2001「一楽古墳」「大和前方後円墳集成」橿原考古学研究所研究成果第4冊　奈良県立橿原考古学研究所
(10) 奈良県立橿原考古学研究所編　1986「芝塚古墳発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」1985年度（第一分冊）　奈良県立橿原考古学研究所
(11) 奈良県立橿原考古学研究所編　1994「平林古墳」當麻町理蔵文化財調査報告第3集　當麻町教育委員会
(12) 前掲（4）
(13) 奈良県立橿原考古学研究所編　1978「第6節　夫婦塚古墳の調査」「兵家古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第37集　奈良県立橿原考古学研究所
(14) 奈良県立橿原考古学研究所編　1994「鳥谷口古墳」奈良県文化財調査報告書第67集　奈良県立橿原考古学研究所
(15) 前掲（6）
(16) 奈良県立橿原考古学研究所編　2002「三ツ塚古墳群」奈良県立橿原考古学研究所報告第81冊　奈良県立橿原考古学研究所
(17) 奈良県立橿原考古学研究所編　2003「只塚廃寺・首子遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第57冊　奈良県立橿原考古学研究所
(18) 奈良県立橿原考古学研究所編　1992「当麻石光寺と弥勒仏概報」奈良県立橿原考古学研究所　吉川弘文館
慈城市歴史博物館編　2012「石光寺　―石光寺旧境内第7・8・9次調査―」慈城市文化財調査報告第4冊　慈城市教育委員会
(19) 奈良県立橿原考古学研究所編　2000「當麻寺境内」「奈良県遺跡調査概報　1999年度（第三分冊）」　奈良県立橿原考古学研究所
(20) 前掲（16）
(21) 村田修三編　1987「万歳山城」「図説中世城郭事典」第二巻　新人物往来社

3節　茶山古墳に関する既往の調査

1946年（昭和21）5月、開墾作業の最中に家形石棺が発見された。その報告を受けて、奈良県教育委員会が緊急の発掘調査を行ったのが最初の調査例となる[1]。なお、調査担当者が現地に赴いた時には、家形石棺の全容が露出しており、石棺の南側蓋石に入った亀裂より蓋が開かれ、石棺内の人骨などが動かされた状況にあったという。不時発見された古墳について、字名より「茶山古墳」と命名された。

調査時点において墳丘は確認できなかったものの、北と東側が円形状をとることから、直径10m前後の円墳と推測された。埴輪や葺石など、墳丘にともなう遺構・遺物については確認されていない。

埋葬施設は、南北方向に長軸をとるよう埋置された凝灰岩製の組合せ式家形石棺である。底石4枚、東西両側石は2枚ずつ、南北両小口石は1枚ずつ、蓋石は2枚からなる。各部材とも加工痕が非常によく残っていることが特筆されている。また、各部材の継ぎ目には、石棺外側より粘土が充填されていたと報告されている。蓋石が約9.9cm（約3寸）であるのに対し、棺身を構成する部材は概ね16.5cm（約5寸）程度と厚い。これについては、追葬を前提としているため、蓋石を意図的に薄く作成しているのではないかと推測されている。

部材によっては面取り加工がなされていることや、明瞭に残る工具痕より、石棺が非常に丁寧か

つ手際良く作成されていることが、報告書では強調されている。

遺物は、石棺内外から出土している。石棺内南寄りでは、頭蓋骨と下顎骨が3個体分出土している。全身骨は揃っていない。そのほか西側石に接して直刀1口が刃を内側、鋩を北側にして出土している。柄寄りの部分の下層からは長頸鏃9本が、先端を北向で出土している。また、東側石からやや離れた位置で、鉄刀子1口を検出したが二次的に移動している可能性が指摘されている。底石の割れ目からは刀子状の鉄片が出土しているが、副葬品であるかどうかは不明としている。

石棺外側では、北側で馬具（鐙・轡）、それに隣接して須恵器杯身8個、杯蓋4個が出土している。須恵器の上に置かれるようにして、土師器壺の破片が検出されている。土師器は細片化していたが、人為的に割ったものである可能性が指摘されている。そのほか棺外南側からは、形状不明の鉄片が出土したとあるが、詳細は不明である。

緊急調査であったこと、また現場到着時点で、遺構が大きく改変を受けていたことなどから、調査面である種の制約を受けていたことは想像に難くない。そのような環境下で、できうる限りの調査を行ったことが報告書より推しはかることができる。

註

（1）島田暁　1956「北葛城郡当麻村大字当麻　茶山古墳」「奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報」第8号　奈良県教育委員会

棺内人骨出土状況　（写真提供：奈良県立橿原考古学研究所）

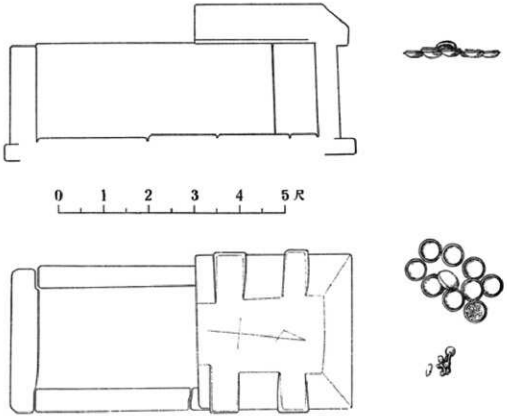


図2　茶山古墳　家形石棺と棺外遺物（1946年）

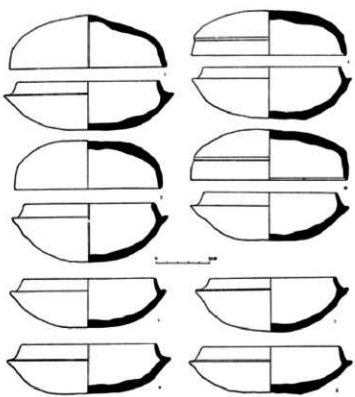


図3　茶山古墳　出土遺物（1946年）

第Ⅱ章　経緯と経過

第Ⅰ章3節でも述べたとおり、茶山古墳は1946年に奈良県教育委員会によって発掘調査され、出土した遺物は奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で保管されている。

現地は、基本的に1946年の調査以降、手を加えられていない。調査によって掘削された部分については埋め戻しされていたが、家形石棺は蓋石が開かれた調査当時の姿のままであった。このため、凝灰岩製の家形石棺の自然劣化の進行が危惧される状況にあった。

そこで葛城市教育委員会は、状況の改善と遺構の保護を行うことを主目的とし、あわせて当時の調査で取得されなかった古墳に関する各種情報を得るため調査計画を策定、土地所有者である奥田郁代氏に調査についてご快諾いただき、奈良県教育委員会文化財保存課と協議の上、保存目的の範囲確認調査を国庫補助事業として実施することとした。

保存の方法については、現地保存することを基本的な考え方とし、調査の結果明らかになった事実をもとに文化庁および奈良県教育委員会と密接に連絡を取り合い、その方法を決定することとした。

調査は、第1次調査として周辺に生える竹の伐採および地形測量を平成29年3月13日から同年3月17日にかけて行った。第2次調査では、墳丘範囲の確認および家形石棺の詳細調査・保存措置を、平成30年2月20日から3月9日にかけて行った。調査では、のべ78人の調査作業員を用いた。

以下、調査日誌抄録を掲げる。

平成28年度（第1次調査）

2017年3月13日　晴れ

現場開始。荷物搬入。古墳部分について竹の伐採を開始。

3月15日　晴れ

伐採竹の搬出作業。測量前準備作業。

3月16日　曇り

古墳および周辺地形に対し、3Dレーザー測量を実施。

石棺内清掃作業。

3月17日　晴れ

家形石棺仮養生。現場撤収作業。

平成29年度（第2次調査）

2018年2月20日　晴れ

資材搬入（階段設置）。墳丘清掃作業。開始前写真撮影。

東西トレンチ設定。掘り下げ開始。

2月21日　曇り→晴れ

東西トレンチ掘削、分層。写真撮影。S=1/10断面図作成。南トレンチ・北トレンチ設定。平面的に掘り下げ開始。南トレンチで凝灰岩・家形石棺・蓋材を新たに検出。北トレンチで須恵器小片が出土。

2月22日

作業中止。

2月23日　晴れ

北トレンチ掘り下げ作業。南トレンチ掘り下げ、凝灰岩石棺片（蓋南東隅か）を取り上げ平面、断面精査。墓壙南および南西隅を検出。土層断面図作成。空撮前準備開始。吉岡来訪。

2月26日　曇→雨

北トレンチ掘り下げ。北側墓壙端検出。写真撮影。南トレンチたちわり作業、地山検出。墳裾撮影。石棺平面図、立面図作成。レベル入れ。空撮目準備

2月27日　晴れ

空中写真撮影。北トレンチ土層断面図作成。石棺床面、平面図作成。各図面捕捉。埋め戻し開始。石棺養生準備開始。奈良県立橿原考古学研究所奥山氏・河崎氏来訪（養生方法打ち合わせ。赤色顔料の塗付ないとのことを確認。）

2月28日　晴→曇

石棺内清掃。石棺蓋材復元作業実施。検出した凝灰岩片のあてはめに成功。南側各蓋材、平面図作成（復元図作成用）。各トレンチ埋め戻し作業。風雨天対策。

3月1日

作業中止。

3月2日　晴れ

石棺南側蓋石断面図・見透し図作成。2tダンプ使用真砂土搬入。石棺埋め戻し用、土嚢作成。現場への運搬。

3月5日

雨天管理

3月6日　晴れ

石棺養生作業。石棺埋め戻し作業(土嚢にて)。完了。

3月7日　晴れ

各トレンチ最終埋め戻し作業。撤収準備開始。現場内、敷地内各種整頓。

3月8日　曇り

現場撤収作業。

3月9日

トイレ等撤収作業。

作業風景

第Ⅲ章　茶山古墳の調査

1. はじめに　−古墳の名称について−

茶山古墳の発見当初の様子については、第Ⅰ章3節にて述べたとおりである。その後、奈良県による詳細遺跡分布調査が実施され、茶山古墳のある丘陵に総数 34 基からなる竹内古墳群が展開することが明らかとなった。茶山古墳も竹内古墳群に属する古墳であり、『奈良県遺跡地図』では「竹内第 34 号墳」とも表記される。この呼称は、群集墳中にある古墳としての茶山古墳の性格を考える上で重要なものであるが、過去に調査された古墳と同一であることを明示するため、本書では茶山古墳の名称を使用する。

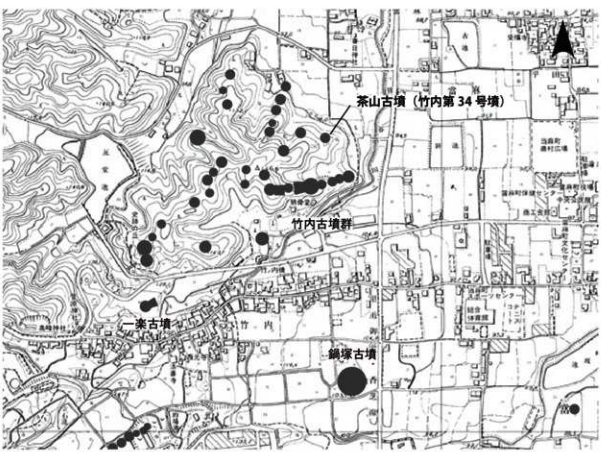


図4　竹内古墳群と茶山古墳（竹内第 34 号墳）

2. 発掘調査

茶山古墳の現状については、第Ⅱ章で述べたとおりである。調査では、

①古墳立地地形の測量調査を実施し詳細な地形情報を取得する。

②墳丘範囲や墳丘構造の詳細、家形石棺の埋設状況を確認する。

③家形石棺の再実測を行い、詳細情報を取得する。

④家形石棺の保存措置を執り行う。

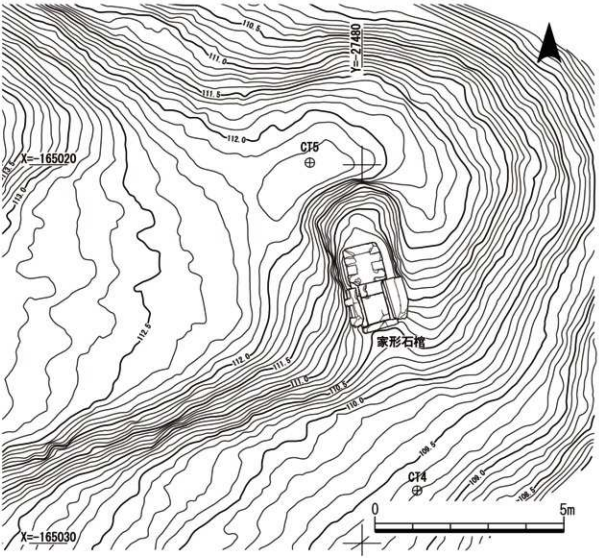


図5　現状地形測量図（S=1/100）

の、4点を目的とすることとした。

①・③にあたっては、3Dレーザー測量を実施し、その成果を反映することとした。②の実施にあたっては、主目的が古墳の保存にあることから、必要最低限のものとして家形石棺を中心に4カ所の小規模なトレンチを設定し、土層断面の観察および平面上での確認調査を実施することとした。

3. 第1トレンチ（図7、東側）

家形石棺長軸のほぼ中間の位置で、石棺の主軸に対し直交するトレンチを石棺の東側に設定した。規模は、幅0.5m、長さ3.5 mである。

i）層序

現表土・堆積土（第10層）の下に、旧表土（第12層）があり、その下層が墳丘盛土となる。墳丘東側は、開墾または前回調査の際掘り上げられた土が堆積して、現状の地形を形成していることが、土層断面より明らかである。第11層も、墳丘本来の情報とは関係のないものである。旧表土

下が墳丘盛土となるが、東端の第13層は異なる。古墳築造後、旧表土が形成される前に墳丘裾へ堆積した土層である。

墳丘は、地山(第21層)を掘り込んで墓壙を設けた後に家形石棺を設置し墓壙内を埋め立て(第22・23層)、その後盛土するという順序で形成されている。墓壙埋め立て後、地形的に下がる東側に土手状に盛土し(第20層)、家形石棺の棺身の高さまで一気に盛土している(第19層)。第19層上面と高さがそろうことから(第17・18層)、ここで一度作業が停止していると考えられる。石棺の棺身上面とも同レベルにあり、想定されている追葬時の作業面とも考えられる。棺蓋を閉じた後に石棺上面を一気に覆い(第16層)、続いて第14・15層と盛土して墳丘を形成したと考えられる。

なお、調査の目的を鑑み、墓壙については検出にとどめ、最低限の掘り下げしか実施していない。

ii)墓壙

狭小ではあったが、トレンチ内において墓壙の肩を平面検出している。墓壙壁と石棺東側石との間隔は、墓壙上面において1mである。

iii)墳丘

層序でも述べたとおり、現状観察できる地形は1946年(昭和21)の発見時あるいは調査の際、家形石棺を露出させるために掘り上げられた土が堆積した結果であることが明らかとなった。このため、地形測量図から墳丘本来の規模を推測することはできない。墳丘規模については、土層断面観察においてトレンチ東端付近で確認できた墳丘盛土と考えられる土層が手がかりとなる。これらがどの程度旧状を保っているか不明であるが、古墳の立地状況を勘案すれば、現状より墳丘裾が大きく東に拡大するとは考え難い。ここでは、家形石棺の主軸と第20層東端から導かれる2.53mを、円墳と想定される墳丘の半径として提示する。

4.第2トレンチ(図7、西側)

第1トレンチの延長上、墳丘の西側に幅0.5m、長さ2.8mのトレンチを設定し調査を行った。

i)層序

現地形は、東に向かって大きく傾斜する。このため、高所である西側からの流入土が想定される。表土(第1層)下にある第2～4層が、流入した堆積土と考えられる。その下にある第5・6層は、上層とは異なる堆積のあり方をしめすことから、墳丘盛土の一部であると考えられる。第7層は、第1トレンチの第19層に相当すると考えられる。その下で地山(第8層)を掘り込む墓壙および墓壙埋土(第9層)を検出した。

墳丘西側は、地形的に高所であることからか、先に地山を大きく削り緩斜面を造成している。その後、角度を変じて墓壙を掘削する。第2トレンチでは、墳丘の西限を類推しえる所見は得られていない。

ii)墓壙

墓壙壁と家形石棺側石との間隔は、墓壙上面で22cmである。第1トレンチの結果と合わせ、想定される墓壙の東西規模は2.15mである。家形石棺は、墓壙の西側に寄せるかたちで設置されている

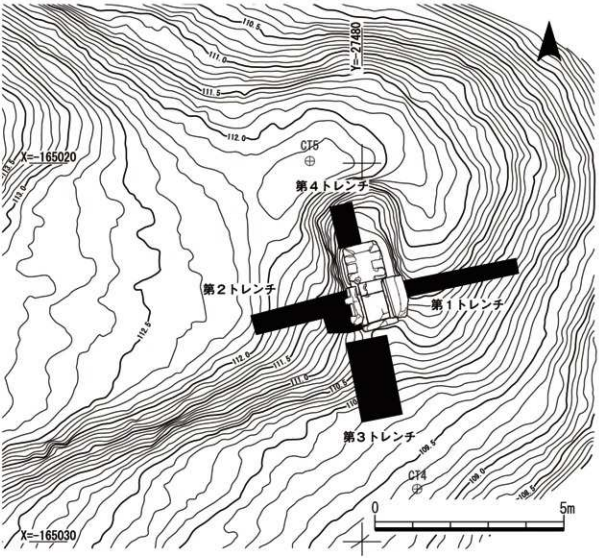


図6　トレンチ配置図（S=1/100）

ことが明らかとなった。なお、南西側に拡張した部分で、墓壙を平面的に検出した。かろうじて南西隅が確認できており、家形石棺の南側小口石も墓壙肩に接近した位置関係にあることが明らかになった。

ⅲ）墳丘

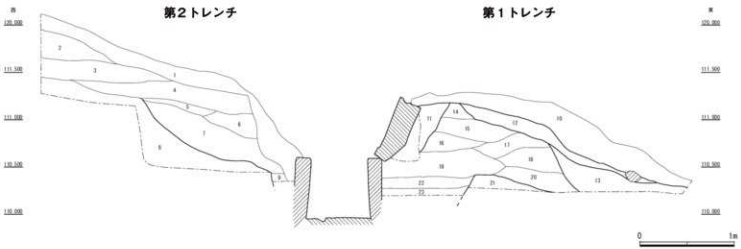
層序でも述べたとおり、トレンチ内で掘割など墳丘を区画する施設は確認されなっかた。第1トレンチの成果である墳丘半径を、石棺主軸を元に反転した場合、第4層の地山との層理面の形状が注意される。しかし、後世の改作の結果とも考えられるため慎重な判断が求められる。

5. 第3トレンチ（図8、南側）

家形石棺の主軸方向の延長上、石棺の南側に幅1m、長さ2.3mのトレンチを設定し調査を行った。

ⅰ）層序

層序は、表土（第5層）、堆積土（第6層）直下で地山（第8層）となる。第3トレンチを設けた石



表土・堆積土

1. 10YR4/6 褐砂　砂礫混土
2. 7.5YR5/6 明褐　砂礫混土
3. 7.5YR5/8 明褐　砂礫混土
4. 10YR4/6 褐　砂混土

墳丘盛土

5. 10YR5/6 黄褐　粘土砂混土
6. 10YR5/8 黄褐　粘土砂混土
7. 10YR6/4 にぶい黄褐　微砂混土

地山

8. 10YR5/6 黄褐　粘土砂礫混土

墓壙理土

9. 10YR5/6 黄褐　粘土砂混土

表土・堆積土

10. 10YR5/8 黄褐　砂礫土
11. 10YR4/4 褐　砂礫混土
12. 10YR3/4 暗褐　旧表土
13. 10YR5/8 黄褐　砂混土

墳丘盛土

14. 10YR4/8 褐　粘土砂混土
15. 10YR4/4 褐　粘土砂礫混土
16. 10YR6/8 明暗褐　微砂混土
17. 10YR4/8 褐　砂礫混土
18. 7.5YR5/6 明褐　粘土砂礫混土
19. 10YR5/6 黄褐　粘土砂礫混土
20. 10YR4/6 褐　砂混土

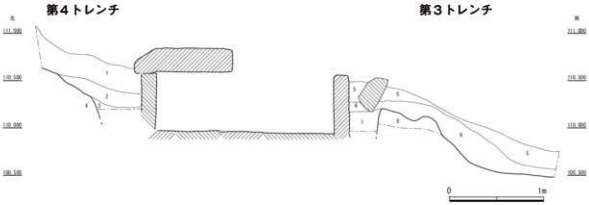
地山

21. 10YR5/6 黄褐　粘土砂混土

墓壙理土

22. 10YR6/6 黄褐　粘土砂混土
23. 7.5YR5/6 明褐　粘土砂混土

図7　第1・2トレンチ土層断面図（S=1/40）



表土・堆積土

1. 10YR3/2 黒褐　砂礫混土
2. 10YR5/4 にぶい黄褐　砂礫混土

墓壙理土

3. 10YR4/6 褐　粘土砂混土

地山

4. 7.5YR6/6 橙　粘土砂混土

表土・堆積土

5. 10YR4/4 褐　砂礫混土
6. 10YR5/6 黄褐　砂混土

旧調査区理土

7. 7.5YR5/4 にぶい褐　粘土砂礫混土

地山

8. 7.5YR5/6 明褐　粘土混砂混土

図8　第3・4トレンチ土層断面図（S=1/40）

棺南側については、1946 年の調査で撮影された写真を見る限り、石棺底石が見えるまで掘り下げられている。このため、大きな改変を受けているのは確実である。土層断面で検出した第8層を切る掘り込みは、過去の調査の痕跡と結論づけられる。したがって第3層は、旧調査区を埋め戻した土である。断面にかかる石材は、家形石棺の南側蓋石の一部であることが明らかになっている。このことから、表土直下の第6層についても、1946 年以降の堆積土であると考えられる。

ii）墓壙

土層観察の結果より、墓壙壁は過去の調査によって破壊されたものと考えられる。このことは、第2トレンチ拡張部で平面検出した墓壙南西隅の状況からも追認される。

iii）墳丘

トレンチ断面では、墳丘盛土に相当する土層は確認されていない。しかし、石棺の南端より約0.9mで地山が削り込まれている様子が観察できる。石棺中軸からは約2m の位置にあたる。第1トレンチの成果に比べ、0.5m ほど短い距離であり旧状を保っているかの判断は難しい。現況を見る限り南側墳丘裾は、後世の改作を受けていると見るべきであろう。また、南側の墳丘裾は、地山を削り出して形成されていたと考えられる。

6. 第4トレンチ（図8、北側）

幅 0.6 m、長さ1mのトレンチを設定し、調査を行った。

i）層序

層序は、表土（第1層）、1946 年調査区の埋め戻し土（第2層）が厚く堆積する。表土とした第1層も、周辺からの流入土の他に、先の調査の際動いた土が混入していると考えられる。第4層が地山となるが、これを切る掘り込みが観察できる。掘り込みを埋めるのが第3層である。掘り込みは墓壙のものと考えられ、第3層はその埋土に相当すると考えられる。

ii）墓壙と過去の遺物出土面

トレンチ設定箇所は、1946 年の調査で須恵器などの棺外遺物が出土した地点である。今回、この須恵器の埋納位置についての所見を得ることがトレンチ設定の目的のひとつであった。結果として、遺物の埋置面の検出はできなかった。これは、前回調査時に南側小口部分と同様、北側も大きく掘り下げられていることに起因すると考えられる。遺物の埋置面は、各種遺物の取り上げ後、石棺の調査のために掘り下げられ失われたと考えられる。同様の理由により、墓壙についても明確にしがたい。しかし、南側と異なり墳丘側を構成する地山面が接近していることから、調査時にこれを大きく削って掘り下げを行っていたとは考えにくい。墓壙の肩と調査時の掘り下げ位置は、近接した位置関係にあるものと推測される。

過去の調査報告より、棺外遺物の出土位置と家形石棺との間には、約 30㎝の間隔があることが明らかである。墓壙壁と石棺が接近する状況は西側で確認されており、南側についてもその傾向がみられる。北側についても同様の状況を呈した可能性は高い。

iii）遺物

第2層より、須恵器杯の口縁部と思われる破片が出土している。

7. 家形石棺（図9・10）

i）調査前の状況

調査開始時点で家形石棺は、２枚からなる蓋石のうち南側１枚が打ち割られ、東西に開かれた状況であった。過去の報告を読む限り、調査直後の様相をそのまま保っていると思われる。

北側の蓋石については、約 70 年間にわたって風雨にさらされた結果風化し、旧状をとどめていない。南側の蓋石については、1946 年に調査が行われた際、既に割り開かれた状態であったためか、図面等は残されていない。

今回の調査では、家形石棺を再実測した上で、南側蓋石の石材を元の状態へと戻した。大きく４つからなる南側蓋石の部材は、裏返され土中に埋没していた部分を中心に保存状態が良好であった。そのため、これらの部材についても実測図を作成し、各種情報を取得することができた。

ii）家形石棺

凝灰岩製の組合せ式家形石棺である。蓋石は２枚からなり、それぞれに縄掛突起が側辺に２個ずつある。棺身は小口石が１枚ずつ、側石はそれぞれ２枚ずつ、底石は５枚で構成される。なお、過去の報告で底石は４枚とあるが、５枚が正しい。各部材とも内面を中心に加工痕が顕著に残る。加工痕の幅は 2.5 ～3㎝で、工具の刃幅が推定される。

棺身の規模は、上面で長さ 2.28m、幅 0.98m である。内法は床面で長さ 1.91m、幅 0.7m、高さは 0.62m である。棺材の厚みは、計測できた南小口石、東・西側石すべてで 18㎝に近似した値をしめす。

蓋石について、北側蓋石については、風化により変化している。現状で長さ 1.03m、幅 0.98m、厚さは天井部付近で 25㎝を測る。参考までに 1946 年調査時における実寸値を引用する。調査当時は、長さ約 1.02m、幅約 1.02m で、天井部平坦面の幅は平均で約 0.45m である。厚さは、天井部付近で約 27㎝、端の部分では約 12㎝とある。縄掛突起の形状など詳細は判別できないが、過去の報告では「矩形の上端が平坦面に続く」と、取りつき方について記述されている。蓋石の内側は、緩いカーブで掘りくぼめられている。

iii）南側蓋石の復元と縄掛突起の使用痕

前述のとおり、割られた南側蓋石について旧状に戻す作業を行った。蓋石の厚さは、天井部付近で 26㎝、端部で 15㎝と過去に報告された北側蓋石と大きく変わらない。縄掛突起は、幅が天井部付近で 18㎝、先端部付近で 23㎝と先に向かって広がる形状をとる。前端部は面取り加工がされている。断面形状は、下部が広い台形状をとる。上面は端部に向かって 10° で立ち上がる。

縄掛突起について、端部下方にて使用痕と思われる剥離面を確認した。特に西側において顕著に認められ、縄掛突起下方のみならず蓋石上面にまで剥離が及んでいた。

この剥離面については、縄掛突起の使用痕と考えたい。西側に顕著に認められるということは、東側に対し使用頻度で差が生じていたことによると考えられる。頭蓋骨の出土数より追葬が想定されており、複数回蓋石の開閉が実施されたと想定される。開閉の方法については、西側の突起に縄を掛け、蓋石の東辺を設置させたままこれを支点として、東に向かって開くという方法がとられたと想定される。おもに西側に大きな力がかかるこの開閉方法によって、使用痕の程度に差が生じたと

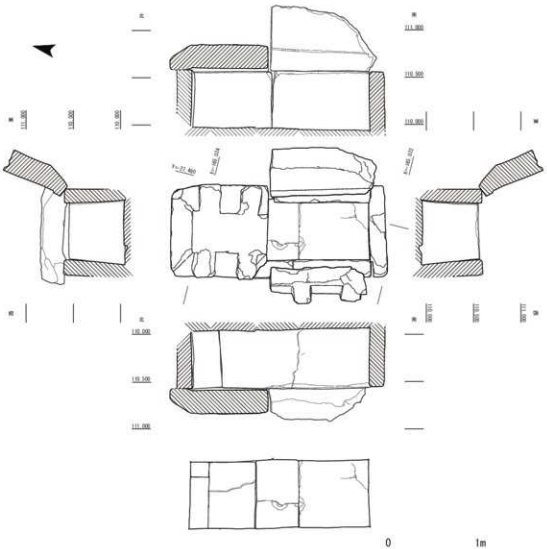


図9　家形石棺実測図（S=1/40）

考えられる。

家形石棺は、墓壙西側に寄せて構築されており、他に比べて東側に広い空間を有する。このことと使用痕の差を合わせて考えた時、家形石棺の構築や開閉時において、東側の空間が重要な役割を果たしていたと想定される。

なお、石棺内部に赤色顔料の使用をうかがわせる様子が見られたが、奈良県立橿原考古学研究所の奥山誠義・河崎衣美両氏の観察所見により否定されている。茶山古墳の家形石棺については、内外面ともに赤彩はされていない。

8. 墳丘

第1トレンチの土層断面の観察所見により、現状地形が本来の墳丘とは異なる傾向をしめしていることが明らかになった。第1トレンチおよび第3トレンチの所見により墳丘は、直径約5mの円墳にな

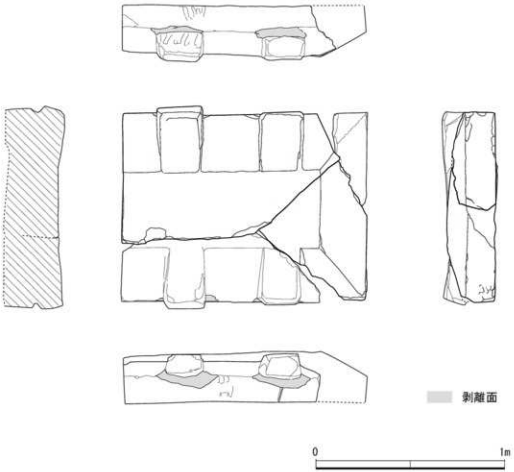


図10　家形石棺　南側蓋石復元図（S=1/20）

ると考えられる。家形石棺直葬の埋葬施設でありながら追葬が認められることから、その都度墳丘盛土を、少なくとも石棺蓋石が開けられる程度には除去したと想定される。その場合、直径5mの円墳というのは、前述の作業を実施する上で現実的な規模と考えられる。

9. 出土遺物

今回の調査で出土した資料は、須恵器の口縁部の破片一点のみであった。ここでは、過去の調査で出土した土器類について、再実測の結果を報告する。

旧報告書には、須恵器杯身・杯蓋あわせて12個の実測図が掲載されている（図3参照）。旧報告書の遺物出土状況を熟読すると、須恵器杯身9個、杯蓋4個の合計13個が出土していることがわかる。奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で保管するものもこれと同数であり、そのすべてを再実測した。

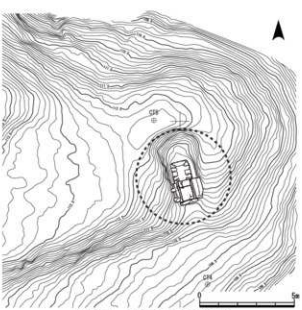


図11　墳丘と家形石棺

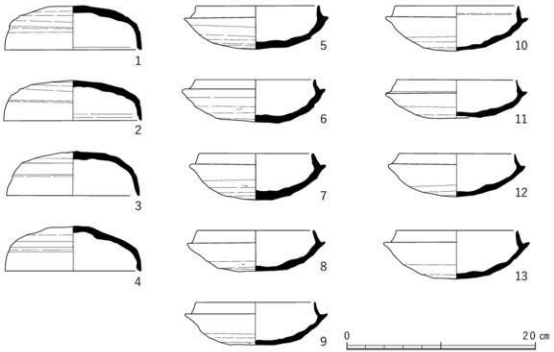


図12　出土須恵器再実測図（S=1/ 4）

図	器種	口径(cm)	残存高(cm)	残存率(%)	調　整	色　調	備　考
1	須恵器杯蓋	14.4	4.7	98	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ	外）5 B5/1　青灰 内）5 B6/1　青灰	「當麻５」の墨書。
2	須恵器杯蓋	14.6	4.3	80	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ	外）N8/1　灰白 内）2.5GY2/1　明オリーブ灰	「當麻６」の墨書。
3	須恵器杯蓋	14	4.7	99	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ	外）7.5Y6/1　灰 内）7.5Y6/1　灰	「當麻３○」の墨書。「當麻３」とセットか？
4	須恵器杯蓋	14.4	4.7	99	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ	外）N6/　灰 内）N6/　灰	「當麻１○」の墨書。「當麻１」とセットか？
5	須恵器杯身	13.1	4.6	95	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ。底部不定方向ナデ	外）N6/　灰 内）N7/　灰	「當麻２」の墨書。
6	須恵器杯身	12.7	4.5	95	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ。底部あて具痕	外）N6/　灰 内）N5/　灰	「當麻」の墨書。
7	須恵器杯身	12.1	4.9	99	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ。底部不定方向ナデ	外）5 B6/1　青灰 内）5 Y6/1　灰	「當麻１」の墨書。「當麻１○」とセットか？
8	須恵器杯身	12.2	4.3	98	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ	外）N6/　灰 内）N6/　灰	「當麻３」の墨書。「當麻３○」とセットか？
9	須恵器杯身	12.6	4.5	99	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ	外）N6/　灰 内）N7/　灰白	「當麻９○」の墨書。
10	須恵器杯身	13.1	4.8	99	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ。底部不定方向ナデ	外）N5/　灰 内）N6/　灰	「當麻６」の墨書。
11	須恵器杯身	12.6	4.0	99	外）回転ナデ・回転ヘラ削り。底部ヘラ起こし後不調整。 内）回転ナデ	外）N6/　灰 内）N6/　灰	「當麻７」の墨書。
12	須恵器杯身	12.2	4.6	99	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ	外）7.5Y6/1　灰 内）7.5Y5/1　灰	「當麻８」の墨書。
13	須恵器杯身	12.7	5.1	90	外）回転ナデ・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ	外）2.5GY5/1　オリーブ灰 内）2.5GY5/1　オリーブ灰	「當麻４」の墨書。

表1　土器観察表

第Ⅳ章　保存措置

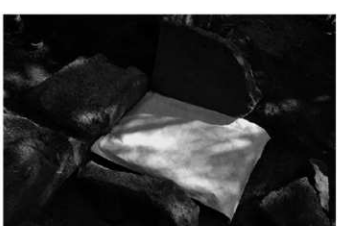
今回の調査の目的は、家形石棺および古墳の保存にあった。保存方法については、奈良県教育委員会文化財保存課と協議を行い、実施にあたっては奈良県立橿原考古学研究所の指導を受けた。

家形石棺については、土中に半分埋もれている状況であり、薬剤の含浸は行えない状況にあった。そのため、家形石棺に特別な処理を施すことなく、開放状態にある現状を是正する方向で現地保存を行うこととした。

家形石棺の保護については、不織布シートをもちいて露出部分を覆うことを基本とした。また、割られて開かれた状態にあった南側棺蓋については、棺内への脱落防止措置を講じた上で、周辺に散らばる部材を集めて位置関係を復元することとした。棺蓋の破断面は不織布シートで保護し、接触部分の欠損防止および棺内への土砂・枯葉等異物の侵入防止を図ることとした。ビニールシートによる遮水については、現地形や環境を考慮に入れて協議した結果、必要なしとの結論を得たため行っていない。

南側棺蓋を本来の位置に戻した後、全体を不織布シートで覆い、その上を真砂土を封入した土嚢で覆うこととした。南側下方には土留のための造作を行い、土嚢の崩落を防止する措置を施した。

以上の作業をもって、家形石棺の露出という状況は完全に解消することができた。また、南側棺蓋を復元し本来の位置に戻す作業を行う過程において、これまでなかった情報を取得することができた。新規に取得した情報の詳細については、第Ⅲ章の「7.家形石棺」の項にて反映・記述しており参照されたい。



底石上に不織布シートを敷き込んだ後に、プラスチックコンテナを積み上げた。次に両側石に掛からないようサイズを調整したベニヤ板で高さを調整した後、両側石と南側蓋石の接触部分が保護されるように不織布シートを敷き込んだ。

割られて東西に開かれた南側蓋石を、正位置に戻した。その後、高さの調整を行いつつ、破断面を不織シートで保護しながら、復元作業を行った。

確認できたすべての部材を使用して、南側蓋石の復元が完了。

家形石棺全体を、不織布シートで覆う。

最低限の量の土嚢を使用して石棺上を覆い、埋め戻し作業は完了した。

第V章　まとめ

1. はじめに

今回の調査により、茶山古墳の構造や家形石棺の詳細について多くの知見を得ることができた。墳丘については、規模や構造、主体部との関係を明確にすることができた。家形石棺については、詳細な実測図を作成できたこと、1946 年（昭和 21）には未調査であった南側蓋石の所見を得ることができたことは重要である。北側蓋石の風化が著しく本来の状態を知ることができなかったことを鑑みれば、南側蓋石の状態を観察できたことは大きな成果であった。

家形石棺の保護については、関係機関の指導を受けつつ適切なかたちで実施できた。概要は第Ⅳ章でしめしたとおりであり、再検証も容易にできる状態にある。現状においては十分な措置を講じたと考えるが、技術や知見の進歩・進捗によっては、より適切な方法で再度確認作業を行うことも視野にいれており、今後の関係各分野の研究の推移に注意したい。

2. 直葬された家形石棺における追葬行為について

茶山古墳の家形石棺は、墓壙内に直葬されたものであることが今回の調査によって確認された。過去の調査時において、家形石棺内からは少なくとも3個体の人骨が出土しており、追葬されたものと想定されている。

人骨の状況より、それらのうちいくつかは改葬骨であることは間違いない。茶山古墳の帰属時期とは異なるが、改葬骨を複数体まとめて一度に葬るという行為は古墳時代終末期に例が見られる[1]。同じことが茶山古墳において行われた可能性は、考えておく必要がある。

しかし、茶山古墳家形石棺内の複数体の人骨は、追葬によって積み上げられた結果である可能性が高いと考えられる。過去の報告にある鉄刀や鉄鏃といった棺内副葬品の配置は、遺体の傍らに置くという通常見られるものであり初葬時の姿を想像させる。その後追葬されたと考えられる改葬骨が棺内南側に集積するあり方は、調査前に異動された可能性が高いものの、追葬時に家形石棺の南側蓋石のみを開き葬ったことによるとも考えられる。南側蓋石の縄掛突起下方に残る剥離痕も、繰り返し蓋石を開いた結果生じたと想定されることは第Ⅲ章で述べたとおりである。墳丘が小規模である点も、追葬を考慮するならば合理的なものと見なすことができるだろう。

3. 竹内古墳群と茶山古墳

茶山古墳（竹内第 34 号墳）の属する竹内古墳群について、これまで詳細な発掘調査が行われた例はない。そのため古墳群の造営期間といった問題や、横穴式石室は確認できているものの他にどのような埋葬施設を採用しているのか、といった基本的な情報に乏しく、実態の把握はできていない。そのようななかで、家形石棺を直葬する茶山古墳は唯一の調査例であるが、その様相を竹内古墳群において一般化することはできない。

遺物については、奈良文化高等学校が所蔵する「伊瀬敏郎コレクション」[2]に、「奈良県北葛城郡当麻町キトラ山出土」とされる資料群があり参考になる。「キトラ山」は、竹内古墳群の位置する丘陵の名称であり、これらの資料の多くは竹内古墳群の遺物であると考えられる。内容を見ると、ほとんどが古墳時代後期に帰属する須恵器である。そのなかに1点のみであるが、古墳時代中期のものと考えられる樽形鼎がある。

竹内古墳群内には、丘陵頂部付近に全長約 42 mの前方後円墳（竹内第 22 号墳[3]）が位置している。群中に前方後円墳を含む例としては、葛城市南部に位置する寺口千塚古墳群[4]・火野谷山古墳群[5]・笛吹古墳群[6]、御所市石光山古墳群[7]があげられる。火野谷山古墳群・石光山古墳群は、古墳時代中期中葉以降に造営が開始されることが知られている。

竹内古墳群に近接する一棗古墳[8]は、国道 166 号線によって分断されているものの、本来は竹内古墳群が位置するキトラ山から派生する丘陵上に位置していたと考えられる。この古墳の築造時期が 5 世紀後半であることが、竹内古墳群の造営開始年代を推測する手がかりとなるかもしれない。

奈良文化高等学校所蔵資料のうち、その他はおもに 6 世紀代のもので占められる。6 世紀末頃の須恵器も散見されることから、竹内古墳群の造営期間についておおよその推定が可能であろう。

茶山古墳は、古墳群の位置する丘陵の東端付近に位置することから、古墳群造営開始よりやや時間が経過して築かれたと考えられる。出土須恵器が6世紀後半に帰属することから、竹内古墳群においては終盤に築かれた古墳との位置付けができるだろう。

4. 葛城地域における直葬された家形石棺について

葛城市内において、現在までに確認できる直葬された家形石棺の例は、茶山古墳のほか新宮原古墳[9]（葛城市染野）の2例しかない。過去、家形石棺の直葬例として知られた「弥宮池西方の石棺（現・弥宮池西1号墳）」は、2013 年の調査で横穴式石室に納められたものであることが明らかになっている[10]。しかし、葛城市の北東に位置する馬見丘陵とその周辺地域では、家形石棺とは厳密に区分されない凝灰岩製の組合せ式石棺を含めれば、横穴式石室に納められるものに比べ、直葬される例が圧倒的に多い。直葬された石棺を埋葬施設に持つ例は、横穴式石室に納められるそれに比べて遅く6世紀後葉に出現し（安倍山5号墳[11]、黒石4号墳[12]）、現在のところ7世紀前半まで見られる（香芝市北今市2号墳[13]）。

葛城市内における家形石棺の直葬例は、北部に偏在する。このことから、馬見丘陵とその周辺地域と相互に影響を与え合っていた可能性を想定できるかもしれない。

5. 今後の課題

今回の調査は、家形石棺の保存が主たる目的であった。前章のとおり実施した保存措置によって、当初の目的は達成したと考えられる。家形石棺の露出という状況が解消されたことは、埋蔵文化財保護の観点においては意味のある事業となったと評価できる。また、その過程において 1946 年の調査では不可能だった墳丘・石棺の詳細な情報を取得できたことは大きな成果といえるだろう。それ

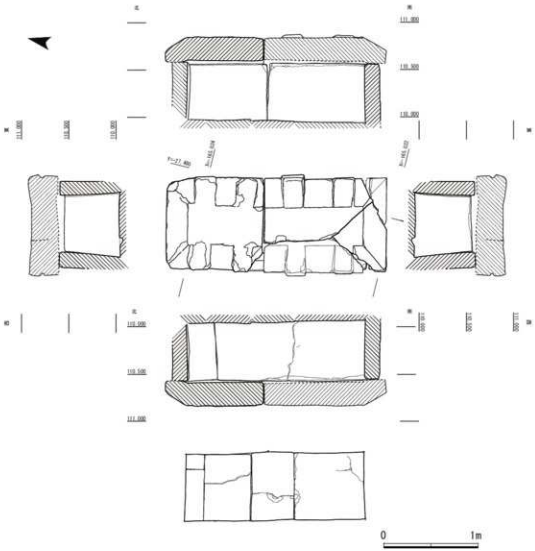


図 13　家形石棺復元図（S=1/40）

らをもとに、家形石棺の復元図を作成した（図 13）。石棺の保護方法については、風化の進行をおさえることはできたと評価できるが、最良の方法であるかについては異論もあるだろう。埋め戻しにあたっては、再発掘・再検証が可能であることに留意している。事業は一応の完結をみたが、保存分野における研究の進捗に注意しつつ、よりよい保存のあり方について考えていくことが今後の課題となるだろう。

註

（1）兵家清水・菰谷古墳群の小石室３では、当初から３体分の改葬骨を納めた木製容器が納められていた。
奈良県立橿原考古学研究所編　2004「兵家清水・菰谷古墳群」奈良県文化財調査報告書第108集　奈良県立橿原考古学研究所

（2）地域文化財研究所編　2013「奈良文化高等学校所蔵考古資料目録　－伊瀬敏郎コレクション－」　学校法人奈良学園奈良文化高等学校

(3) 小栗明彦　2001『竹内22号墳』『大和前方後円墳集成』　橿原考古学研究所研究成果第４冊　奈良県立橿原考古学研究所
(4) 奈良県立橿原考古学研究所編　1991『寺口千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第62冊　奈良県教育委員会
(5) 奈良県立橿原考古学研究所編　1979『新庄火野谷山古墳群』奈良県文化財調査報告書第31集　奈良県教育委員会
(6) 千賀　久　2001『笛吹10・22・38・65号墳』『大和前方後円墳集成』　橿原考古学研究所研究成果第４冊　奈良県立橿原考古学研究所
(7) 奈良県立橿原考古学研究所編　1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊　奈良県教育委員会
(8) 鳥本　一　1938「大和竹之内出土の形象埴輪」『大和志』第５巻第６号　大和国史会
小栗明彦　2001「一棗古墳」『大和前方後円墳集成』　橿原考古学研究所研究成果第４冊　奈良県立橿原考古学研究所
(9) 奈良県立橿原考古学研究所編　1979『首子遺跡群発掘調査報告』當麻町埋蔵文化財調査報告第２集　當麻町教育委員会
(10) 葛城市歴史博物館編　2015『弥宮池西１号墳　－保存のための範囲確認調査報告－　付塚畑古墳の調査』　葛城市文化財調査報告第５冊　葛城市教育委員会
(11) 前園実知雄　1974「安倍山第５号墳（第105地点）『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊　奈良県教育委員会
(12) 奈良県立橿原考古学研究所編　1977『佐味田狐塚古墳』奈良県文化財調査報告書第29集　奈良県教育委員会
(13) 奈良県立橿原考古学研究所編　2006「北今市古墳群」『奈良県遺跡調査概報』2005年（第二分冊）　奈良県立橿原考古学研究所

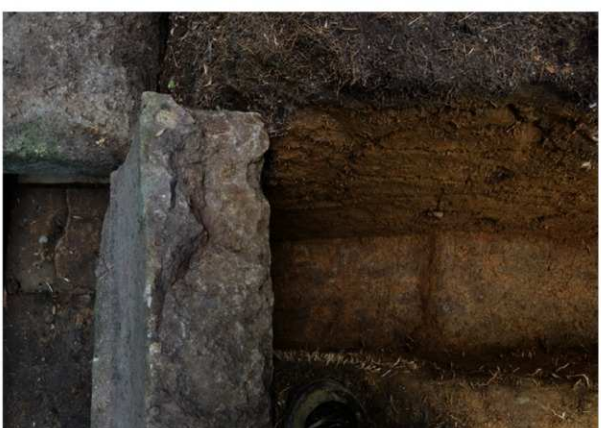
調査前現況（南から）

調査前現況（南西から）

完掘状況（上空から、上が北）

完掘状況（西から）

第１トレンチ土層断面（南東から）



第１トレンチ墓壙検出状況（南から）

第２トレンチ土層断面（南東から）

第２トレンチ墓壙検出状況（南から）

第３トレンチ土層断面（西から）

第４トレンチ土層断面（西から）

家形石棺（直上から）

家形石棺　棺内の状況（南から）

家形石棺　閉塞状況（北西から）

家形石棺　西側側石にのこる工具痕（南東から）

家形石棺　南側蓋石　西側縄掛突起周辺の剥離状況（西から）

家形石棺　南側蓋石　東側縄掛突起周辺の剥離状況（南東から）

報告書抄録

ふりがな	ちゃやまこふん
書　　名	茶山古墳
副書名	保存のための範囲確認調査報告
巻　　次	
シリーズ名	葛城市文化財調査報告
シリーズ番号	第6冊
編著者名	神庭　滋
編集機関	葛城市歴史博物館
所在地	〒636-2123　奈良県葛城市忍海250番地1

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
茶山古墳（ちゃやまこふん）	奈良県（ならけん）葛城市（かつらぎし）當麻（たいま）	29211	13−A No.51	34° 30′ 43″	135° 42′ 1″	第1次調査 2017. 3.15～3.17 第2次調査 2018. 2.20～3.9	25	保存目的の範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
茶山古墳	古墳	古墳時代	古墳 家形石棺	須恵器杯身・杯蓋	

葛城市文化財調査報告　第6冊

茶山古墳

－保存のための範囲確認調査報告－

発行年月日　2020年3月25日

編　　集　葛城市歴史博物館

〒639-2123　奈良県葛城市忍海250番地1

発　　行　葛城市教育委員会

〒639-2127　奈良県葛城市長尾85番地

印　　刷　橋本印刷株式会社

〒639-2155　奈良県葛城市竹内365番地1

Cultual asset investigation report No.6

the Tyayama-tomb

2020

Katsuragi-city Board of Education